

1 研究テーマ

食生活を中心とした家庭基礎の題材構成を考える

2 はじめに

高等学校学習指導要領の改訂で、家庭科は普通教育において、『家庭総合』（4単位）、『生活技術』（4単位）、『家庭基礎』（2単位）の3科目を設けた。『家庭基礎』2単位を選択した場合、一年間のみの学習となる。生徒の生活経験が不足する中、学校における家庭科教育の重要性は、言うまでもないが、この現状でどのように授業を展開していくのか、教員の創意・工夫が求められている。

また、近年、児童生徒の食に関する健康問題が深刻になっており、全国的な調査においても、朝食の欠食率が小中高と加齢と共に割合が増えているという報告がある。また、自分本位なダイエット、個食、偏食などの問題も健康と大きく関わっている。一生を健康で過ごすためには、食の重要性を認識させ、しっかり自己管理をする意識付けが大切であると考え、食生活を中心とした家庭基礎の題材構成を提案することとした。

3 研究の内容

私の考える家庭基礎の題材構成

学 期	学習の項目内容	指導時間	学習指導要領	保健
一学期 乳幼児期～青年期 26時間	1 家庭基礎ガイダンス	(2)		
	ホームプロジェクトと学校家庭クラブ		(4)	受精、妊娠、出産とそれに伴う健康問題
	2 乳幼児期 ～子どもの世界を知ろう～	(8)	(1)ア(7)	
	生命の誕生	1	(1)イ(7)	結婚生活と健康
	子どもの心身の発達	3	(1)イ(7)	
	子どもの生活	4	(1)イ(7)・(2)アイウ	環境と食品の保健
	3 青年期 ～自立を目指そう～	(16)	(1)ア(7)	性的自立
	青年期の課題	1	(1)ア(7)	思春期と健康
	一人暮らしを考える	2	(2)アイウ・(3)ア(7)	
	食生活を見直す	9	(2)ア(7)(1)(9)・(3)イ(7)(1)	環境と食品の保健
衣生活を快適に	4	(2)イ(7)(1)	環境衛生の基準 食品衛生の基準	
二学期 壮年期 28時間	4 壮年期 ～共に生きる～	(28)	(1)ア(7)	
	家族と共に	4	(1)ア(1)	
	自立した消費者として	4	(3)ア(7)(1)(9)	
	理想のマイホーム	4	(2)ウ(7)(1)	家族計画の意義
	親の立場で保育を考える	4	(1)イ(1)(9)	結婚生活と健康
	家族の栄養と食事	10	(2)ア(7)(1)(9)・(3)イ(7)(1)	健康の保持増進と

補食としての
間食の重要性

食習慣の自立
安全で衛生的な
食品

生活習慣病を防ぐ
食生活の実践
家族の食生活の管理
妊娠・授乳期の食生活の管理

三学期 高齢期 16時間	5 高齢期 ~豊かに生きる~	(14)	(1)ア(7)	疾病の予防
	高齢社会の現状	1	(1)ウ(7)	
	高齢者の心と体	3	(1)ウ(7)	加齢と健康
	高齢者を支える社会システム	2	(1)ウ(4)	
	高齢者の生活	8	(2)ア(7)(4)(ウ)・(3)イ(7)(4)	加齢に伴う 形態や機能 の変化
	6 生活設計	(2)	(1)ア(ウ)	

生理機能、身体機能
に伴う嗜好の変化
栄養バランスの重要
性

一年を人の一生とし、各学期をライフステージとする。

・自分の生活に関連付けやすくするため、時間軸のとらえ方に衣食住や消費生活などを関わらせる空間軸のとらえ方を取り入れる。

各ライフステージで食生活を扱うことで、その重要性を認識させる。

・各ライフステージの食生活の問題、改善を図る指導内容の検討。

高等学校保健・小中高家庭科の系統性を分析することにより、指導内容の焦点化を図る。

・保健との連携を図って2教科から「健康」というコンセプトで迫ることによる学習内容の横断化。

・小中の学習内容を把握することによる学習のねらいの明確化。

4 成果と課題

本研究の成果として、

小学校家庭科、中学校技術・家庭科と『家庭基礎』との内容の系統性を分析することで、指導内容の精選と重点化が可能となった。

『家庭基礎』と高等学校保健体育科『保健』と関連を分析していくことで、学習の横断化を図ることが可能となった。

ライフステージにそった題材構成により、自身の生活課題に関連付けて、より身近に学習を展開することが可能となった。

重点課題としての食生活分野の内容を充実することが可能となった。さらに、実習時間を確保することができ、生徒の学習意欲の継続が可能となった。

以上のことがあげられる。

何より、自分自身の『家庭科』に対する考え方が大幅に変わり、これからの教師としての生き方の方向性が見えてきた。このことが一番の成果であると考えている。

今後は、実践に当たって、生徒の実態を十分に把握した上で、自分の思いの押しつけにならないような展開を考えていきたい。また、評価方法の研究、ホームプロジェクトと学校家庭クラブ、他教科との関連、総合的な学習の時間など学校全体の教育活動との関連を図ることをさらに考えていきたい。